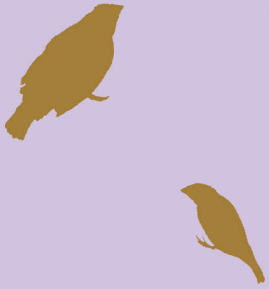
Genji Monogatari

源氏物語 下

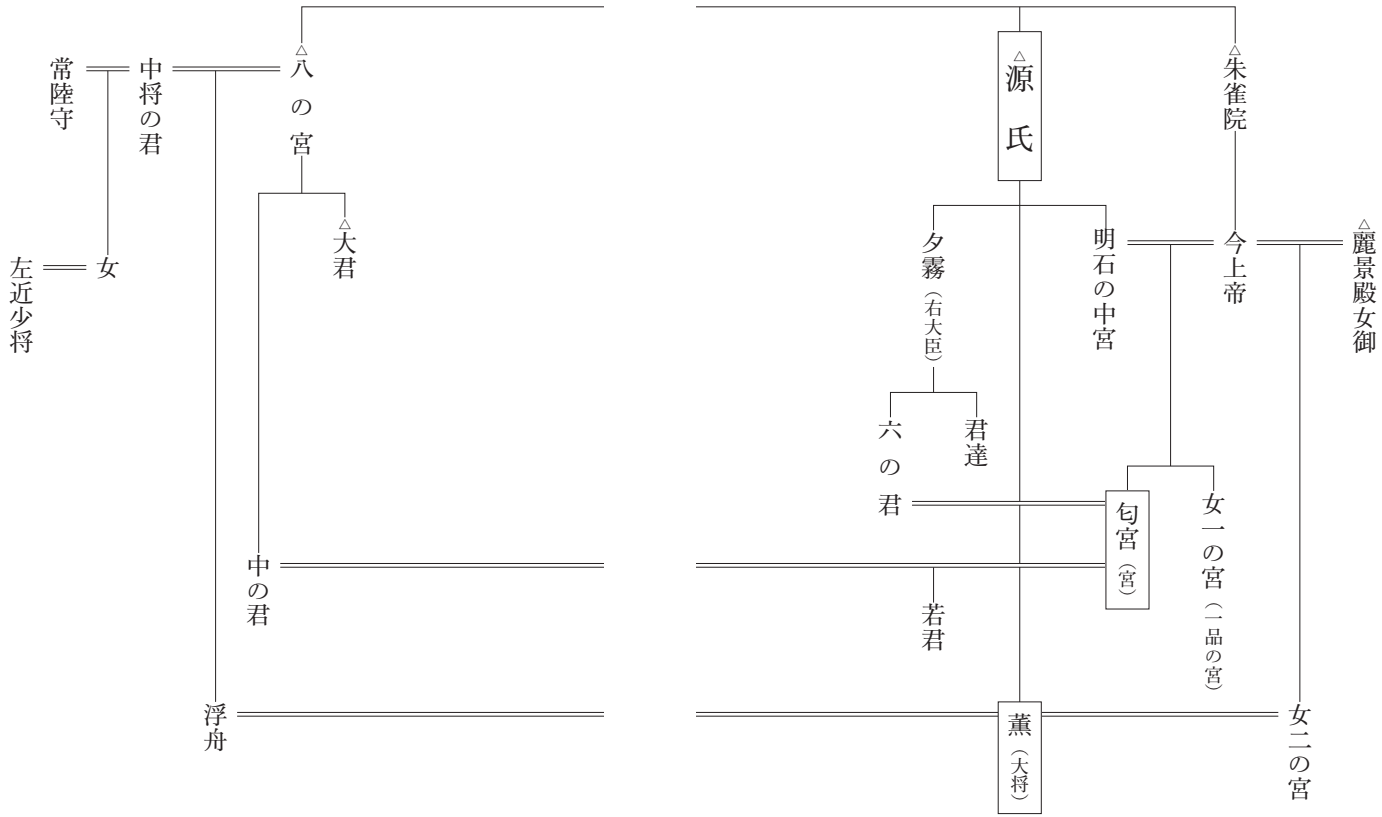
角田光代 訳



浮舟（うきふね）

女君の苦悩と決意

二人に求められ、悩み抜いた果てに、女君が決意したこととは……。


△朱雀院
△麗景殿女御
今上帝
女二の宮
△源氏
明石の中宮
夕霧（右大臣）
君達
六の君
若君
匂宮（宮）
女一の宮（一品の宮）
薫（大将）
△八の宮
△大君
中の君
浮舟
中将の君
常陸守
女
左近少将

＊登場人物系図
△は故人

宮（匂宮）は、今もまだ、あの女君（浮舟）とほんの少しばかり逢った夕暮れを忘れることができずにいる。「たいした身分ではなさそうだったが、人柄がじつに可憐な感じだったな」と、たいへんな浮気性である宮は、思いを遂げられなかったことが残念で、忌々しくすらあり、

「こんななんでもないことなのに、むやみに勘ぐって嫉妬するのだね。そんな人だったとは思わなかったよ、情けない」と、中の君をけなしたり、恨み言を言ったりする。そのたび中の君は苦しくて、彼女がだれであるのか、本当のことを言ってしまおうかと迷うのである。けれども、「大将（薫）はあの女君を重々しくは扱わないだろうけれど、愛情が軽いものではないからこそ、ああして隠しているのだから、彼女のことを出しゃばって話してしまったりしたら、宮はそれを聞くだけですませるようなことはないだろう。宮ときたら、お仕えしている女房の中にも、かりそめにも言い寄って手をつけてみようと思い立った者がいれば、信じられないことにその人の実家にまでも訪ねていくような、とんでもないご性分なのだから。これほど月日がたっても女君のことをまだ忘れられずにいるのだから、きっと何かみっともないことをしでかすに違いない。女君について、もしほかから伝え聞いてしまったのなら仕方がない、大将にも宮にも気の毒なことになるかもしれないけれど、防げるような宮のご気性ではない。もしそうなったら、母親は違うとはいえ彼女は私の妹

なのだから、宮が赤の他人と関係を持つよりは世間体が悪いと思うだけだ。とにもかくにも、私の不注意で何かまずい事態になるのは避けよう」と考えなおしては、困ったことになったと思いつつも女君に関して何も言わずにいる。といって、もっともらしい嘘を言うこともできないので、胸ひとつに押しこめて、世間によくいる、嫉妬をしている妻を装っている。

大将のほうは、宮とは正反対にのんびりとかまえていて、女君が待ち遠しく思っているだろうと心苦しく思いやってはいるものの、自由には動けない身分なので、何かそれ相応の機会がなければ宇治に行くのも難しく、またかんたんに通えるようなところでもない。

「恋しくは来ても見よかしちはやふる神のいさむる道ならなくに（伊勢物語／恋しいならば来ればいい。神の禁じる道ではないのだから）」と言いますが、宇治への道は「神のいさむる道――神の禁じる恋路」よりもつらいのです。

けれども、「そのうちに充分な扱いをしよう。もともと山里に行った時のなぐさめにしようという心づもりだったのだ、少し日数の掛かりそうな用事をこしらえて、ゆっくりと行って逢うことにしよう。そうして、しばらくはだれにも知られないような住処を用意して、だんだんとあの女君の気持ちも落ち着かせておいて、私自身のためにも、世間から非難されないように、目立たないようにするのが得策だろう。急にあの人を迎えて、『だれなのか』『いつからか』などと訊かれて何か言われるのもうるさいだろうし、当初の私の望みに反する。それに中の君の耳に入ればどう思うことか。大君ゆかりの宇治からきっぱり女君を連れ出して、大君を忘れたような顔をしていると思われるのは不本意だ」などと考えては、逢いたい気持ちを抑えているのも、例によってこの大将の悠長すぎる性格のせいであろう。その女君を京に移すための場所を用意して、こっそりと造らせている。

大将は以前より多少とも忙しくなったけれども、やはり中の君には怠りなく心を寄せ続けている。それを近くで見ている人たちも、なぜそこまでとあやしむほどである。しかし中の君は世の中のこともだんだんとわかってきて、世間の人の有様を見聞きするにつれ、「この大将こそは本当に亡き姉君のことを忘れずに、後々までも深い愛情を持ち続けてくれている、そのお手本のような人なのだ」としみじみありがたく思うようになった。大将は年齢を重ねるにつれて人柄も世間の声望もますます立派になっていくので、宮の気持ちがあまり信頼できないような時に、中の君は、「思いも寄らなかった巡り合わせだこと……。亡き姉君が考えてくれたように大将とは結ばれず、こうも気苦労のたえないお方と連れ添うことになってしまったとは」としょっちゅう思うのである。けれどもその大将と対面することはめったにない。あの当時からずいぶん年月がたってしまって、内々の事情をよく知らない女房は、「ごくふつうの身分の者ならば、この程度の昔のつきあいでも忘れず親しくしているのはおかしくないけれど、制約のある高貴な身分で、常識外れの交際をしているのはおかしい」などと思うかもしれず、中の君はそれに遠慮しているのである。さらに宮がたえず大将との仲を疑っているのもますますつらくなり、気兼ねをするうちに自然とよそよそしい態度になってしまうのだが、大将のほうは今までとまったく変わらない気持ちでいるのだった。宮の浮気な性分こそ、中の君にとっては見るのも嫌な時もあるけれど、それでも若君がたいそうかわいらしく成長するにつれて、宮は「ほかにこういう子は生まれないかもしれない」とかけがえなく思い、中の君を気のおけない親しい相手として、だれよりもだいじにしているので、以前より多少は悩みも減りつつある。

正月のはじめを過ぎた頃、宮は二条院にやってきて、ひとつ歳を重ねた若君の相手をして遊んで

いると、昼頃、幼い女童が緑の薄様（鳥の子紙）で包んだ大きな包み文に、ちいさな鬚籠を小松につけたもの、それにあらたまった感じの立文を持って、遠慮もなく走ってくる。それらを中の君に渡すので、宮は「それはどこからの手紙？」と訊く。女童は、

「宇治から、大輔のおとどにと持ってきたのですが、どなたに渡したらいいのかと使いの者が困っていたので、いつものように奥さま（中の君）がご覧になるのかと思って私が受け取ったのです」

と言うのもまったく落ち着きがない様子で、「この籠は金で作って色をつけたものですよ。小松も本物そっくりに作ってあるわ」とにこにこして言い続けるので、宮も笑ってしまう。

「じゃあ私もいっしょに鑑賞しようか」と宮が手に取ろうとするので、中の君ははらはらして、

「お手紙は大輔のところに持っていきなさい」と言う。その顔が赤らんでいるので、宮は、大将がなんでもなく見せかけた手紙だろうか、宇治からと言うのもそれらしいし、と勘ぐって手紙を手にする。しかしもし本当に大将からの手紙であったら、と思うとひどくばつが悪いので、

「開けてみるけど、恨んだりしないよね」と言う。

「みっともないですわ。なぜ女同士でやりとりするような内輪の手紙をご覧になりたいのでしょう」と言う中の君は慌てた様子もない。

「じゃあ見よう。女同士の手紙はどんなふうなものなのか」と宮が開けると、じつに若々しい筆跡で、

「ご無沙汰していますうちに年も暮れてしまいました。山里の憂鬱さは、峰の霞も晴れる間がないほどです」

とあって、端に、

「これも若宮に差し上げてください。つまらないものですけれど」
と書いてある。とくに気の利いたところのある手紙でもないけれど、筆跡に見覚えがないので、宮は不審に思って、いっしょにあった立文をよく見てみると、確かに女の字で、
「年が明けましたがいかがお過ごしでしょうか。あなたさまには、どんなにかたのしいお祝いごとがたくさんあることでしょう。こちらでは、まことにけっこうなお住まいで行き届いた配慮をしていただいておりますが、やはり姫君（浮舟）にはふさわしくないように思います。こうしてじっともの思いに耽（ふけ）っていらっしゃるよりは、ときどきはそちらに伺わせていただいて、お気持ちもおなぐさめになれば……と思うのですが、姫君はあのできごとで、気の咎（とが）めるおそろしいところだと思っていらっしゃるようで、そちらに参りますのは気が進まないとお嘆きのようです。若宮さまに、卯槌（うづち）（邪気払いのお守り）を贈ります。ご主人さまのいらっしゃらない時にお目に掛けてくださいませ、とのことです」
と、こまごまと、正月なのに忌み言葉をあえて避けることなく、何やら愚痴っぽく書き連ねてあるのが気が利かない感じで、宮はくり返しくり返し見て、やっぱり変だと思い、「もう言ってしまいなよ、だれ？」と訊く。中の君は、
「以前、宇治の山荘に仕えていた人の娘が、何か事情があるとかで、最近あちらに住んでいると聞きましたが」と答える。
宮は、ふつうの女房とは思えない書きぶりだと思い、「気の咎めるおそろしいところ」とあるのにはっとして、この手紙がどこから来たのか、思い当たった。
卯槌はみごとにできていて、暇を持て余している人の細工だと思われる。二股になっている小松

の枝に、作りものの山橘（やまたちばな）の実を刺し通して、
まだふりぬものにはあれど君がためふかき心にまつと知らなむ
（まださほど年数のたった松ではありませんが、若宮のために千代のお栄えをお祈りし、真っ先に差し上げます私の深い志をおわかりください）
と、どうということもない歌を、あのずっと忘れられずにいる女（ひと）のものだろうかと宮は思い当たり、目が離せなくなる。
「返事をお書きなさい。書かないのは薄情だよ。隠すような手紙でもないのに、なぜ機嫌を悪くするのか。私はあちらに行っていよう」と言って場を立つ。中の君は女房の少将たちを相手に、
「困ったことになりました。幼い子が受け取ったことにどうしてもだれも気づかなかったの」と小声で言う。
「気づいていましたらこちらにお届けするはずがありません。いつだってこの子は考えなしの出しゃばりなんです。子どもというのは行く末が楽しみだと思えるくらいに、おっとりしているのがかわいらしいのに」などと憎々しげに言うので、
「まあ静かになさい。幼い子に腹を立てるものではありませんよ」と中の君は言う。
この子は、去年の冬にある人がこちらに預けた女童で、顔立ちがじつにかわいらしかったので、宮もたいそう目を掛けていたのである。
宮は自分の部屋に戻り、「どうもおかしい。宇治に大将が通っているのは、この何年かずっと続いていると聞くが、忍んで夜泊まる時もあるとだれかが話していたな……、いくら愛した人の思い出の地だからといって、あり得ない外泊をするものだと思っていたが、そうか、こういう人をかく

まっていたからか……」と考えていると思い当たることもある。宮は学問のことで出入りさせている大内記（中務省の役人）で、大将と親しいかかわりのある者を呼び出す。やってきた大内記に、「韻塞ぎをしたいので、適当な詩集を選び出して、こちらの厨子に積んでおくように」と命じてから、

「右大将（薫）の宇治通いはまだ続いているのか。お寺をじつに立派に造ったそうだね。なんとかして見られないか」と言う。

「じつに荘厳なお寺をお建てになり、不断の念仏を修める三昧堂なども、まことに尊いお志で造られたと聞いています。大将殿の宇治へのお通いは、去年の秋頃から、以前より頻度が増えました。下々の者たちがこっそり言うには、『女を隠して住まわせていらっしゃいますが、いい加減なお気持ちではないのでしょう。あのあたりにお持ちの荘園の者が、大将殿のご命令で参上してはお仕えしています。その者たちに宿直をさせたり、京からごく内密に必要なものを送っていらっしゃいます。いったいどんな幸運な女が……、とはいってもああしたところで、さすがに心細いお暮らしをしていらっしゃるでしょう』と、ついこのあいだ、十二月頃に噂していたと聞きました」と言う。なんとうれしい話を聞いたものかと宮は思い、

「それがだれなのか、はっきりとは言わなかったのか。あそこに前から住んでいる尼を大将は見舞っていると聞いたが」と言う。

「尼君は廊に住んでいるらしいです。この女人は、今度あたらしくお建てになった寝殿に、こぎれいな女房たちも大勢使って、不足のない暮らしをしているようです」と大内記。

「おもしろい話だな。大将は何を思って、いったいどんな人をそんなふうに囲っているのだろう。

やっぱり大将は一癖あって、ふつうの人とは違うね。右大臣（夕霧）など、『あの大将はあまりにも仏の道に深入りしすぎて、ともすると夜も山寺に泊まることがあるそうだが、身分に似つかわしくない軽々しさだ』と非難していると聞いたが、確かに、なぜそんなに仏道修行のために人目を忍んで行くのだろう、やはり思い出の地に未練を残しているのだろうかと思っていたのだが、そういうわけだったのか。どうだ、自分は人よりも真面目だとえらそうにしている人のほうが、とりわけだれも考えつかないような隠しごとを持っているものだよ」と宮は言い、じつにおもしろい話だと思っている。大内記は、大将にたいへん親しく仕えている家司（仲信）の娘の婿だったので、大将が隠していることも耳にしているのだろう。宮は内心で、「どうすればその人が以前二条院で逢った人だと確かめられるだろう。大将がそれほどまでにだいじに囲っているのだから、そのへんにいるような女ではないのだろう。中の君とはいったいなぜ親しくしているのか？　二人で示し合わせてこの人を隠しているというわけか」と思うと癪に障る。

この頃の宮はただそのことばかりを思い詰めている。賭弓（射術の競技）、内宴（帝の私宴）などの新年の年中行事が終わって気持ちも落ち着いた頃、司召（役職を任命する公事）などといって人々が気を揉むようなことは何も関係がないので、宇治にこっそり行くことばかり宮は考えている。あの大内記はなりたいと思う官職があって、夜も昼も、なんとか宮に気に入られようと思っているさなかなので、宮はいつもよりは親しげに用を言いつけて、

「どんなに難しいことでも私が頼むことはなんでも聞いてくれるか」などと言う。大内記はかしこまって控えている。「じつは困った話なのだが、その宇治に住んでいるという女は、以前私とちょっとした関係があった女で、行方知れずになっていたのを、大将がさがし出して引き取った、……